

第6回「一流・本物と未来を語る居酒屋懇親会」参加リポート

2009年3月2日(月)高向 巖氏(北洋銀行会長、札幌商工会議所会頭)を主賓にお迎えして



「Boys & Girls, be ambitious!」

「国際社会で生きていくために」

北海学園大学経営学部3年 Y T

今回の一流・本物懇親会において、僕は一流の方の人との付き合い方に焦点をあてて高向会長との懇親会に参加させていただきました。

国際社会で生きていくためには、もちろん仕事ができるということが最も重要視されることだと思いますが、その他の要素の1つとして人との付き合い方も重要であると考えたからです。そして2時間ではありましたが、実際に高向会長との会話の中で3つのキーワードを見つけることができ、とても価値のある懇親会となりました。

今回の懇親会で僕がキーワードとしてとらえた3つとは、

- ① 自分を知ってもらい、相手を知ること。

高向会長はまず自分のことを詳しく自己紹介してくださいました。社会ではまず自己紹介をする、自分を知ってもらおうということが常識であり、話をする上でとても重要な位置にあるということ認識させられました。特に高向会長の自己紹介は今まで一流・本物懇親会に参加していただいた方々の中でもより詳しく自分について紹介してくださいました。自分はよくこのような席でつい自己紹介を忘れてしまうことがあります。自分について相手によく知ってもらおう。これは常に心にとどめておきたいことであると感じました。

次に高向会長は僕たちが自己紹介すると一人一人の名前を紙に書いて覚えてくださいました。これは自分自身すごく驚きました。同時にとても感激でした。まず相手の名前を覚えること。自分を知ってもらって、相手を知る、それが第一歩なのだと考えさせられました。

② 話す相手に興味を持つこと。

高向会長はとても好奇心が旺盛な方で、本当にいろんなことに興味を持っておられました。そのなかでも特に他の人と違うと感じたのは最初の自己紹介の時でした。例えば、最初の自己紹介においても我々の名前を聞くだけでなく、いままで住んでいた場所についても詳しく聞いて紙に書いていました。いままで初対面の人に対して、こんなにも興味を持って接していた人に会ったことがなく、驚きました。相手に興味を持つことは、相手を知る上でまず必要なことなのだと実感させられました。

③ 人と会うとき、話すときは常に笑っていること。

高向会長はすごく話やすく、すごく人を引き付ける方だという印象を受けました。それは常に笑顔だからなのではないかと感じました。これは当たり前なことなのかもしれませんが、嫌いな人の前や知らない人の前では、つい笑顔でないことがあります。「嫌いな人と挨拶する時も笑顔でいる。」これは高向会長が直接話してくれたことですが、こうすることでよりうまく人と付き合い合っていくのだと高向会長との会話の中で学びました。

これら 3 つが特に今回の懇親会において高向会長から学んだ人との付き合い方のキーワードです。これらは特に自分に欠けていたものだったので、忘れずにこれからの生活において活用していきたいと思います。

また、高向会長から最後に” Boys and Girls, be ambitious ! “というメッセージをいただき、これからも失敗を恐れずにどんどんいろんなことに挑戦していく気持ちを忘れずいこうと思いました。

高向巖会長はまさに一流の方で、今回このような機会を設けていただき、4000 円では足りないくらいの貴重な時間を過ごさせていただきとても勉強になりました。お忙しい中、我々のためにお時間を割いていただき、どうもありがとうございました。

「国際社会はすぐそこにあるーBe ambitious!ー」

北海学園大学大学院経営学研究科 修士1年 NB

今回の懇親会で高向会頭が話された内容から、3つのことを学ぶことができた。

1. 国際感覚を身につける

中国との国交回復を進めているときに、通訳の仕方によって相手に伝わる意味が変わってしまうという話題があった。その国や民族の文化や習慣、価値観を知らずに日本でのやり方を通そうとすれば、かえって失礼にあたる場合もある。

グローバル化の波はモノやカネの流通だけではなく、ヒトの交流も始まっている。日本における外国人の労働は規制されているが、その規制も徐々に緩和される傾向にある。自分にとって外国人への労働市場の開放は、江戸時代の開国から明治維新へと時代が転換したイメージと重なる。江戸時代から世界に目を向けていた人たちが、明治時代にも活躍している。今後、世界ではもちろん日本で活躍するためにも、国際的な感覚を養うことが必要になると感じた。それには自分が関心のある国へ実際に行って生活してみることだと思う。しかし、それが難しい状況ならば、日常的に外国文化と接する機会をできるだけ多く捉えるようにする必要を感じた。

2. 国際社会と地域の距離は近づいている

たくぎんが破綻し、その業務を北洋銀行が引き継ぐといった前例の無いことを成し遂げようとしたとき、高向会長がアメリカで学んだ経済学の知識が役に立ったとうかがった。地方で仕事をしていると、世界との繋がりや関連は薄いように感じてしまう。しかし、アメリカで得た知識が地域の経済を助けたことを知り、北海道とアメリカの繋がりを感じた。

現在、世界は未曾有の経済危機に見舞われている。さまざまな国が知恵を出し合い、この危機を乗り越えようとしている。しかし、経済危機の影響は地方の中小企業にまで及び、日本でも失業者の更なる増加が予測されている。現代社会において、世界で起こった出来事は国だけではなく、すぐに地域にまで影響を及ぼす。国際社会と地域との距離はどんどん近づいているのである。日常では国際社会を遠い存在に感じてしまいがちだが、国際的な視点や考え方を身につけることは現代社会で重要であると感じた。

3. 自分の成長を自分で願う

札幌ー東京間の飛行機利用者のほとんどが東京のビジネスマンであったため、北海道新幹線への道民のニーズが無く、誘致活動が進まなかった。そこで新幹線の開通は、沿線の町おこしに繋がることを訴え、道民のニーズの掘り起こしを行ったという話があった。地域を活性化させるには、都市部から地域への一方的なアプローチではなく、地域から都市部へのアプローチを含めた双方向のアプローチが必要である。それに加え、地域自体のニーズや、街を良くしたいという気持ちが強力な後押しとなると感じた。

このことは人にも当てはまるのではないだろうか。自分自身が「成長したい。こんな人間になり、こんな仕事をしたい。」という強い気持ちを持つことが、実現への大きな自分への後押しになるのではないかと感じた。

国際社会は自分が思っているよりも身近なところに存在する。自分の国際感覚を磨き、夢を持って Boys & Girls, be ambitious! 自分には更に Be young at heart! 高向会頭からこのようなメッセージを頂いたように感じました。ありがとうございました。

「一流・本物の営業力」

北海学園大学大学院経営学研究科 修士1年 NS

一流・本物懇親会には、「未来を担う学生達が実際に一流・本物の方々に接し、それを手本として人生の指針を学び、夢や希望を持って世界へ羽ばたいて欲しい」とする菅原先生の願いが込められています。私たち学生は先生の願いに応えるため、一流の皆様にお会いするときには、毎回必死で頭を回転させ、より多くのものを学び取ろうと脳に汗をかかなければいけません。

今回の懇親会においても、高向会頭からは、たくさんの一流・本物を学ばせて頂きました。しかし、ひとつだけ、いつもと違うように感じたことがあります。それは、私たちが高向会頭から必死に学ぼうとする気持ち以上に、高向会頭が、私たち学生に夢や希望を与えたいとする熱い情熱が勝っていたように感じられたことです。

お忙しい中、私たちにこのような素晴らしい時間をご提供下さった高向会頭には、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

高向会頭には、「一流・本物の営業力」がありました。営業力は、簡単に測れるようなものではありませんが、私がこのように感じた理由は、高向会頭が以下の3点を兼ね備えていたからです。それは、①焦点が絞られたトーク、②相手の気持ちを察する能力、③タイム・マネジメント脳力、の3つです。

まず、焦点が絞られたトークですが、これは実は非常に難しいことであると考えます。焦点が絞られていないと、何時間話をしても、キーメッセージを受け手側が読み取ることはできません。しかし、高向会頭のお話は、伝えたいとするメッセージが常に明確にありました。それは、「若いうちに広い視野を養い、北海道の未来を担える人材になって欲しい」とする高向会頭の想いです。高向会頭のお話は常に、このキーメッセージに沿って構成されていました。

特に、日本国内だけでなく、国外に目を向けることが、どれほど重要かについては、会頭の様々な体験談から非常に強く印象に残っています。国際経営の知識が海外とのビジネスにおいてのみならず、日本国内で働く場合においても非常に有効な知識であることを聞

き、これまで以上に、広い視野を養うことの重要性について再認識するようになりました。

高向会頭は、私達がどのようなことに興味を示し、どのような構成で話しを進めれば、説得力があり、かつ楽しい時間が過ごせるかを考慮した上で、焦点を絞ったトークを展開して下さいました。そのおかげで私たちは、会頭の想いを十分に理解し、私たちの未知の可能性について夢や希望を抱くことが出来るようになったように感じます。

次に、相手の気持ちを察する能力についてですが、これは、ビジネスにおいて重要なコミュニケーションを円滑に進めるために必要不可欠な能力のひとつです。高向会頭の体験談の中で、中国からのお客様が来日された時、中国語の歌を覚えて歓迎したというお話や、アメリカ人に北海道を伝える際に、アメリカの歴史に準えて、「明治以降に、本州からの移民が開墾し、クラーク博士の指導のもと開拓がなされた」という工夫を凝らした言い回しをしているというお話がありました。これらはともに、相手を喜ばせるためにはどうしたら良いかを常に考えた結果の行動であると考えます。

また、商工会議所の仕事として、札幌-函館間に新幹線を誘致するための取り組みを行う際にも、相手の気持ちを察する能力が大いに発揮されています。まず、地元民に新幹線が誘致されると「函館-札幌間が通勤圏になる」という、市民の生活レベルの非常に分かりやすいキャッチフレーズを用いることで、地元民の心を捉え、その後 50 万の署名簿をどう使えば有効に国を説得できるかを考える際も、マスコミをうまく利用するという方法を用いています。このように、常に相手の行動を見据えたこれらの動きを見ていると、孫子の「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず。」という言葉が思い出されます。

最後に、タイム・マネジメント能力についてですが、僅か 3 時間弱の飲み会の時間をうまく計算した、高向会頭の場の進め方には本当に驚かされました。

時間をどれだけ有効に使えるかは、ビジネスの世界においてはお金よりも重要です。3 時間弱と決められた時間内に、8 名の学生すべてに夢と希望を与えるということはけっして簡単なことではありません。特に、人数が多いと、一言も話をせずただ聞いているだけで終わってしまう学生が出ることも少なくありません。

しかし、高向会頭は、常に 8 名の学生全員への心配りを忘れずに、ひとりひとりに均等に語りかけて下さいました。全員の質問に対して十分なアドバイスやメッセージを伝え、誰一人飽きさせることなく、時間管理を行っていた会頭のリーダーシップ能力は、私たちが見習うべき、最高のお手本です。

このように、3つの要素をすべて満たしている高向会頭の「一流・本物の営業力」こそが、高向会頭の最大の強みであり、グローバル化の進行する今日の企業トップに必要な不可欠な重要な要素ではないかと私は感じました。

私は、3年間営業の仕事をしておりましたが、話をしただけでこのように強く「一流・本物の営業力」を感じたのは、高向会頭が初めてです。こんな素晴らしい上司の下で仕事が出来ると部下が本当に羨ましい、というのが今回の懇親会で高向会長にお会いして私が感じ

た一番の気持ちです。

高向会頭の北海道に対する熱い想いは参加した学生全員が十分に受け取ったように感じます。今年に入り日本政府が中国人旅行者に発給する観光ビザを個人レベルにも拡大する方向で検討を始めたことや、中国で今年のお正月に放送された大ヒット映画「非誠勿擾」のロケ地として、北海道が用いられ、知床、小樽等の魅力が中国全土に広く知れ渡ったことにより、今後の北海道はビジネスチャンスの可能性に満ち溢れています。

北海道の活性化に貢献できるような人材になるためにも、今後、国際的な広い視野を養うための努力を惜しまずに、国際経営の勉強に励んでいこうと考えております。

「一流から学ぶ努力の方法」

北海学園大学経営学部2年 KI

初めに、高向徹会長との居酒屋懇親会を企画して頂いた、菅原先生や諸先輩方に感謝の意を述べさせていただきます。ありがとうございます。とても、温かい人柄でとても会長とは思えない方でした。

高向会長に会うまで、私は北洋銀行の会長だから、本格的な経済、とくに北洋銀行だから北海道経済についての話だろうと思い、経済についての質問を考えていました。しかし、高向会長の半生を中心にお話していただいて、私は考えていた質問はあまり意味はなく、その場所で考えて質問でき、これからの人生の歩み方の参考になりました。

高向会長は『これまでの人生を運命に従って生きてきた』とおっしゃっていましたが、私は高向会長ご自身が努力してきた結果だと思えます。

例えば、高向会長は、あまりお酒は飲めませんが、カラオケのレパトリーを増やながら、上手く歌うことで宴を盛り上げたり、引っ込み思案でなかなか話せないで笑顔で対応するなど、短所を補いながら目的を達成するということです。上記の例は接待つまり客をもてなすことが目的であり、酒を飲む人間、宴を盛り上げる人間などが条件となります。それを無理だからあきらめると思わず、出来ないからこそ、その部分を補う努力をすることが必要だと思いました。私は今まで出来ないものを可能にすることが努力だと思っていました。しかし、これは目標が成し遂げるまでの間でイライラしたりと精神的に安定しないことがあるので、今後補って努力することをしていきたいと思いました。

また、高向会長はこれらを克服するまでに上司や先生に言われたからとおっしゃっていましたが、素直に受け止めるのも必要だなと感じました。私は誰かに言われると反発してしまうことがよくあります。自分で認めた時は理解しますが、それ以外は黙っていたりしてすぐ態度に表れます。しかし、言ってくれる人間のほうが少なく、私自身を理解してアドバイスしてくれる、それを受け止めることで自分と向き合えるのだとようやくわかりま

した。これからなんでも受け入れて自分を磨いていきたいと思います。

本当に貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

「チャレンジすることの大切さ」

北海学園大学経営学部2年 TO

今回は北洋銀行の会長ということで、お会いするまではさすがに今までの一流本物懇親会以上に緊張しました。お会いする前は銀行員のトップということなので、やはりもっと堅い方かと思っていました。実際にお会いしてみるととても気さくな方で、イメージとは全く違って正直驚きました。最初に自己紹介したときも一人一人に名前をしっかりと聞いてくださって、みんながそれぞれの出身地を紹介したときも、その出身地ごとにその出身地に関係があるお話がどんどん出てきて守備範囲の広さにも驚きました。

また、出身地や今まで住んでいた場所の話から、それまでの経緯を予想するということをして、それが鋭い視点から結構当たっていたので面白かったです。そういうことを自己紹介のときにするのはちょっと変わっていてあまり見たことがありませんでしたが、普通の自己紹介でも普通の人とは違う視点から見ていることが勉強になりました。

特に今回勉強させていただいたことは、勉強など何かを学ぶ時は何でも大きいことから入っていくこと、それから小さなことを学んでいくこと。そして、人として企業として最終的に社会貢献していくためには、官僚よりは民間のほうが多くのことにチャレンジできて絶対良いということ、この言葉がこれから社会人になる自分にはとても心に残っています。

個人としては、前回の懇親会ときは質問ができなかったのですが、今回は多くの人との人脈を作るにはどうしたらいいかということ質問させていただきました。その答えとして、教えていただいたことは、僕はおとなしい性格なので、その性格を変えること、そして常に笑顔で接すること。特に、自分が苦手な人には笑顔でいること、それを続ければ性格が変えられて、笑顔でいることで相手も心を開いてくれるということを教わりました。これからは人と接するときには常に笑顔で、多くの人と接していきたいと思います。

今回は本当に貴重な時間を過ごさせていただきました。普通に生活していたら絶対に聞けないような商工会議所の裏側の話なども聞けて多くのことを学ばせていただきました。このような時間を作っていただいた高向会長と菅原先生には本当に感謝しています。ありがとうございました。

「北海道最大のロビイスト」

北海学園大学経営学部4年 NN

北海道において最大の影響力を持つ北洋銀行会長であり、札幌政財界を取りまとめる札幌商工会議所会頭、高向巖氏の印象は、威風堂々たる風格を持ち、それでいて穏やかさを持つ人物であったのを記憶している。また、高向氏の著書「北海道経済の針路」を読んだ感想も合わせレポートしたい。

高向氏を知ったのは、2007年に行われた札幌市長選挙においてである。自分と同じ興部町出身の清治真人氏が自民党推薦候補として出馬した。結果はご承知の通り“負け”であった。その際、清治氏のバックに居たのは高向氏や札幌経済界の重鎮たちである。自分は生キャラメル立案者で、父の幼馴染でもあるノースプレインファーム社長の大黒宏氏に選挙の手伝いを依頼された。フルーツパフェ一つで買収され、選挙を手伝うハメになった。

最初は選挙というものに関わる事をいぶかしんだ。しかし、そこで札幌の経済人、主に札幌青年会議所のOBの方々や北海道の政治家達と触れる機会を持てた。そして、真剣に、より現実的に北海道の未来を考えるきっかけとなった。少なくとも北海道を愛しすぎる自称パトリオートには良い経験として鮮明に記憶している。

新幹線

高向氏は北海道新幹線の札幌延伸を強く訴えている。ここで新幹線建設の論議をする事はそれこそ建設的でない。当然の事ながら建設されるべきであると考え。元々、青函トンネルは新幹線を通す為に作られている。映画「海峡」にて森繁久彌の「北海道に本州の風を通してやろうじゃないか」という言葉に象徴される。大型公共事業は中央の政争に翻弄されてきた。北海道において公共事業というものは無くしてはならないものだと考える。肥大化した建設業の延命という観点ではなく、北海道の開拓、道民の生活を豊かにする真の開拓は完遂していない。

北海道には資本蓄積が少ない。その点を補助金や公共事業で補填していた。新幹線、高速道路などは作られて当然なのである。自分の地元、興部町は鉄道を無くされた。また、公共バスも本数が減り廃止の危機を迎えている。地方の利便性は退化して行くばかりである。過疎化が進む地方の意見など聞く気の無い中央主権国家である。遅すぎる。新幹線の札幌延伸は魅力的で未来のある事案だ。しかし、遅すぎたのだ。新幹線の作られる十年、二十年の間に地方は死に絶える。つまり、東京と札幌の発展の話でしかない。高向氏には重要な事であろう。しかし、我われ地方民は新幹線より明日の飯なのである。ちんたらちんたらお国がやっていたのでは遅すぎるのだ。この際、爆弾テロでもやっていただかないと困るのである。新幹線の利権を握る森喜郎元総理を暗殺でもするくらいの気概を見せていただきたいものだ。

民間は利益の為に動く。人口の少ない、収益性の低い地域は軽視される。更にはチェーンストア理論に基づいて、地方の商店街の破壊を行っている。ガンジーの言う道徳無き商業とは、まさに北海道の直面している今現在なのではないかと考えてしまう。

私は北海道新幹線を稚内まで伸ばし、さらにサハリン、そしてユーラシア大陸まで伸ばす事を提案した。これには夢がある。高向氏の言う 30 年後の北海道においてこのプロジェクトはスタートしているのであるだろうか？東京というアジア最大の都市から人は北海道を経由し大陸へ。中国という 21 世紀の世界の領主国から人。ロシアという世界最大の資源国からモノ。夢も希望も全てを繋ぐのである。元々、満州国は 5 族協和という考えの基に建国された。旧帝国軍人はバカであったかも知れない。しかし、浪漫の大きさでは現代人を遙かに凌駕していたと思う。

不良債権

高向氏は拓銀吸収の話に触れ、不良債権とやくざ暴力団の関わりについて話された。バブル崩壊後の不良債権 200 兆円の内、約 60 兆円は“ヤミ”即ちやくざ絡みであったとされる。日本の経済は政、官、業の「鉄の三角形」からなる「日本株式会社」「護送船団方式」と呼ばれるシステムで機能してきた。しかし、バブル経済期以降はこれにやくざが加わり、「政、官、業、やくざ」の「鉄の四角形」へと変わった。90 年代以降の日本の不況の最も大きな要因であるとされ、“ヤクザ・リセッション”やくざを主因とする景気後退と呼ばれている。

まさしく広域暴力団山口組の代紋は四角形の菱であるとは笑い話にならない現実なのだ。また、大手金融機関、三井住友銀行は山口組のフロント企業に成り果てているとの情報は信じられないほどネット上に羅列している。それだけでなく、多くの金融機関、銀行はやくざを代理人とした欧米資本の支配下に置かれている。こういった事は事実であるにも関わらず、メディアには報道されない。

なるほど、やくざ達は代理人に過ぎない。金融を作ったロスチャイルドは代理人を用い世界各国に金を貸し付けていた。彼らやくざの主たる者達とは、先の懇親会にて会った方々だと確信せざるをえない。主に欲望の為に日本国民を食い物にし、自らの私腹を肥やす連中とは、アメリカという自由と民主主義の仮面を被った悪魔達である。戦後 60 年以上我々を騙し続けてきた。これらの意見は陰謀論の話で切り捨てられる。学問とは呼べないのかもしれない。しかし、事実である。まったくもって道民のお金を預かる北洋銀行には、そんな連中とは付き合わないで欲しいものである。

国際関係

世界の中の北海道という位置づけには、とても共感を覚える。友好のためには、相手国の歌を歌う。素晴らしい考えだと思う。中国との関係にも言及されていた。中国は今後、世界の領主国になると考える。中国の方々に多く来て貰える北海道の可能性は無限大だ。また、海外の人々は、これほど雪の多く降る地域に近代的都市を建設している事に驚く。

著書において、日本には友人がいない。孤立している。と記されている。政治的外交の

弱さによるものと考えられる。北海道には先に記したアジアからの観光客。ロシアと地理的に距離を近くする利点がある。ロシアに限っては、旧ソ連時代からの固定概念で“怖い”というイメージしか無い。それにより良い感情を抱く道民は少ない。しかし、ロシアの実質的最高権力者であるウラジミール・プーチン首相は親日家である。また、先日サハリン2も稼動した。新たな友人を作る努力は怠らないで欲しい。

中国に憧れられ、ロシアとも距離を近くする。更に世界でも稀有な近代的資本の整備。世界でも最も豊かな社会体制。これらが上手く融合すれば北海道は世界最強の土地となるのではないか。イスラエルは戦争に適した土地であるならば、北海道は平和に適した土地であって欲しい。

まさに時代は明治維新と同じく歴史の転換期である。ライフサイクルの問題なのだ。世界の運営権は欧米主導からアジア主導に移ろうとしている。この変化に上手く乗らなければ北海道はおろか日本の未来は無い。

高向氏は北海道をアメリカと同じくニューフロンティアだと語られる。しかし、アメリカはニューフロンティアをさらに世界に求め、資源と利益の為、虐殺と戦争を繰り返している。北海道も倣うべきであろうか？アメリカという国は、先住民インディアンを虐殺し、侵略することにより成り立った。同じく、北海道の歴史も血塗られた侵略の歴史である。アイヌ民族から土地を奪い、資源を奪い、今を生きる我々の社会体制は成り立っている。しかし、だからと言ってアイヌ民族に媚びるつもりなど更々無い。必要なものは融和である。もはやアイヌ、和人も無い。あるのは北海道民という存在だけだ。何故、私達は競争し合い、戦い続けなければいけないのだろうか？そこには資本主義システムの抱える根本的な問題があるとしか考えられない。

また、著書では教育の問題にも触れられている。私が思うに必要なものは優秀な教師よりも、北海道民としての確立されたアイデンティティなのではないかと考える。現在のフリーター、派遣社員や希望を持ってない若者達の多くに見られるのは戦争待望論というものだ。行き先の見えない経済情勢、希望の無いこの国の未来。若者達は戦争さえ起これば全ては変わるという理論だ。もはやこの世で信じられるものはカネのみなのだろうか。市場原理主義の円満で即物的な、アメリカ式に言う“合理的な”社会は弱者をそぎ落としてゆく。総合的に見れば、北海道は弱者である。その中でも弱いものいじめをしているのだから救いようは無い。

世界情勢の変化で学歴がクソの役に立つであろうか？旧態依然の考え方など尻を拭く紙にもならない。30年後の北海道はどうなっているか。このままなら、今よりもっと悪くなっているに決まっている。もし、抜本的な改革により良くなっている、良くしている時ならば、その時の北海道の首相は自分に違いないであろう。北海道を救うのは広い視野を持ったボトムアップであると信じている。